厚岸(アツケシ)のミヅグモのその後

常 木 勝 次

北海道大學理學部動物學教室

衆知の如く，我が國におけるミヅグモについては，吉澤覺文氏發見にかゝるものを，1930年に岸田久吉氏が發表されたのが最初の記錄で，その後11年を經た1941年に，北海道厚岸から齋藤三郎博士が報告されたのが第2の記錄である。しかもその後はどこからも全く知られていない。京都のものは爾後誰も採集することができずにいることは蜘蛛類同好者のあまねく知るところであるが，厚岸のものはどうかというと，この方は全く無關心に放任されたまゝになつているのである。そこで筆者は1昨年(1949)，厚岸のミヅグモの發見者である石塚星郎學士から，採集地の狀況を詳にきくことができ，又內田亨教授からも當時の事情をお伺いすることができたので，同年6月15日，このクモの生態を更に追求する目的をもつて同地へ採集に行つた。

結論から先に言うと，ミヅグモ採集は不成功に終つたのであつた。かねて聞いて行つた小池はどうしても發見できず，諸般の事情から察するに，戰時中埋められてしまつたのではないかと思われた（但し更に內田教授によくお尋ねしてみると，この想像は必ずしも決定的ではないが)。そこで新しい採集池を搜すべく，厚岸町の東方に擴がる廣大な濕地中の，出會う限りの沼，溝，池，水溜り等を，終日長柄のサデでもつてつつき廻したが，遂に何處にも1頭をも見かけることは出來なかつた。そこで翌日は雨をついて搜索の範圍を擴げ，厚岸から汽車で4驛程西行して，有望そうな條件をそなえた濕泥地中の池沼を片端から搜し步いて，泥まみれになつて奮闘したが，結局ミヅグモを發見することはそこでも全く不可能であつた。

これらの事情から考えるのに，厚岸のミヅグモは，如何なる事情によるのか，石塚氏發見の1坪にも滿たぬ1小池以外には，棲息しておらぬもののようである。以上のようなわけで，折角たくさん用意した採集瓶は蟻の巢の採集瓶に早

變りして，空しく歸つて來たのであつたが，厚岸のミヅグモ發見當時の事情は，一般によく知られておらぬので，以下この間の消息を簡單にお傳えしておこう。

初めて厚岸でミヅグモが發見されたのは多分昭和8年(1933)頃で，當時北大理學部の學生であつた前記石塚星郎氏が，御專攻の Protozoa 採集のために，理學部臨海實驗所官舍に程近い1つの小池を網ですくつていた時であつた。採集網に時々小さいクモがひつかかつてくるのに氣づかれた。不思議に思つてその1つを捕えて，内田教授に見て頂いたところ，これがミヅグモであることが判明した。その小池というのは面積1坪足らずの水たまりで（全体が濕地なので水は下から湧いているらしい），深さ1メートル半位の古井戸のような貧弱なものであつた。さてミヅグモがおるということはこれで判明したのであつたが，當時誰もこういうものに興味をもつものがいなかつたので，この發見はそのままになつていた。ところがずつと後に，當時ジャンジャン蜘蛛をやつておられた齋藤博士が，内田教授からこの話を聞きこみ，再び石塚氏を煩してこのクモを入手され，Acta のあの報文となつたのである。

以上のようなわけであるから，厚岸のミヅグモは，初めて見つけられてから8年を經た後に，再び同じ池から採集されたのであつて，京都の場合とは，少し事情が違つているのである。ただ類似している点は，このクモが厚岸でも，奇妙な分布狀態を示しているということである。どうしてその小さい水溜りだけに棲むようになつたのか，又どうして附近の同樣好適條件をそなえた池沼には棲んでいないのか，これらの問題は少なくとも現狀では全くの謎である。